

随想 ずいそう



先生

絵顔でいて

吉田 正子



先生がっかりしている、
ぼくたちがっかりする。
先生がさみしそうな顔をしていると
ぼくたちもさみしくなる。
先生が笑顔でいると、
ぼくたちもうれしくなる。
先生、いつも笑顔でいて。
ぼくは、先生の笑顔が大好きです。
これは、四年生から担任しているU
男の日記である。どちらかというと、
注意されることが多い子である。これ
を読んだとき、私はドキッとさせられ

ただでなく、こみあげてきそうな涙
をこらえるために、ノートを握りしめ
たまま教室を離れてしまった。
職員室にもどると、自宅の机の前の
額に入れてあるものを思い出した。そ
れは、小学校で教育実習をしたときの
総合反省のレポートである。

『心で教える、心で教わるためには、
こどもの心を開くような場と、機会
をつくること、つまり、教師がこど
もの前に立ったときには、笑顔で話
したり、聞いたりしていることが必
要だということはないか。…また、
こどもと接するときにはこどもの内に
ある心を洞察し、どんな心を持って
接しなければならぬかを考えなけ
ればならない。…』

今、改めて読み返すと、赤面するよ
うな文章ではある。しかし、初めて教
壇に立ったときの、新鮮で、正直な思
いがストレートによみがえってくる。
それにしても、教育実習のときに指
導いただいた『教壇に立つときは、笑
顔で…』ということ、いつも心がけ
ていたのに、今の自分は、顔をひきつ
らせながらも笑顔をつくらうとしたり、
ときには、こどもたちとはまったく関

係のない感情までも、そのまま教室へ
持ち込んでくることに気づき、情け無
くなってしまう。

今年、教師になって八年目になる。
教壇に立つても、こどもの心がいくぶ
ん見えるようになり、六年生のこども
たちを自由に動かせるようになったつ
もりでいた。しかし、こどもたちには
厳しくとも、自分自身に対しては、た
いへん甘く、わがままになってきてい
たのであろう。ちょっと乱暴な字では
あるが、どれほど切ない気持ちで書い
たものか、U男の日記は、八年前の自
分に引きもどし、鏡の前に立たせて、
自分の心を見つめ直させるほどの力を
持っていたのである。

今では、教室の机のうえにも、U男
の書いた日記と、教育実習のときの総
合反省の縮小コピーが、裏返しになっ
てはさまれている。

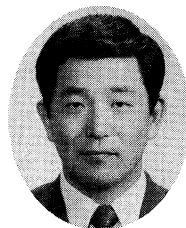
放課後、こどもたちが帰って静かに
なった教室で、時折、そっと出しては
読み返すことがある。そして、棚の上
の鏡を取り出し、じっと自分の顔を見
つめることもある。心で教え、心で教
わることの難しさを痛感しつつも、自
分の顔もなかなかいいな、などと思
いながら。

(郡山市立福良小学校教諭)



目のかがやき

鵜沼 秀雅



「教頭先生、お電話で―す」の呼び声
に、息急ぎ切って受話器をとる。

「うぬまひでおくんでしょ」

「いや、ちがいます」

「あれ、うぬまくんでしょ」

「はい、そうです」

ちよつとかすれた聞き覚えのある声、

この声は多分中学時代の同級生O君だ。

「ひでおくんでないの」

「いや、ひでまさだよ」

顔で笑いながら、声の方では、旧友の

名を間違えるなんて失礼などといっ

たやりとりを聞いていた職員室の同僚

は、くすくす笑っている。

「え、それでは、この名簿の名前間

違っているのか」

つまりは、同級会を二十七年振りに

開くので、ぜひ参加して欲しいとのこ
とであった。転勤ばかりしている私を